



ちぬき広島の昔ばなし

ひろしま

むかし



さぬき広島の昔ばなし

発行 ふれ愛の町ひろしまをつくる会
(公財)日本離島センター
(離島人材育成基金助成事業)

編集 島案内人実行委員会
平井光子 平井末子
三野道子 横瀬通子

協力 HOTサンダルプロジェクト会長
正木かつみ

印刷 榎日柳印刷所

平成27年3月

さぬき広島の昔ばなし

ひろしま

むかし



《坊主屋敷》

船が丸亀から広島に近づくにつれ、まるで集落を抱きかかえるような山、王頭山が見える。江の浦港から、歩いてほぼ一時間で頂上に着く。

初めて山のとっぺんに登った人々の目に、巨石と砂漠のような景色は、どんな風に映ったのだろうか？自然の造形に圧倒され、「坊主屋敷」の伝説が生まれたのかもしれない。



【王頭山・どんどろ山】



【王頭砂漠】

広島の花崗岩の風化と侵食による造形美は、地質学的な観点から、自然の生み出すジオサイトとしても注目されている。

《宮島さん》

青木港から県道を北へ・・・500メートルほど先に、赤い鳥居が見えてくる。大鳥居をくぐって、緩やかな坂の参道を歩いて行くと、床下が見えるほどの高さがある拝殿が建っている。

その奥には二つ並んで本殿があり、右側が青野神社。左側に、鹿の彫り物があるのが巖島神社（宮島さん）である。



【赤い大鳥居】



【左側が巖島神社の本殿】

宮島さんの言い伝えには諸説あるが、何とかして「さぬき広島」の地に、宮島さんをお祀りし、この島を発展させ、子孫が長く栄え、幸福に暮らせるように・・・と、信仰心の厚い島民のたつての願いが込められている。

さぬき広島の昔ばなし

● 第一話 「坊主屋敷」



[絵] 小林大悟
(多摩美術大学 日本画専攻卒業)



● 第二話 「宮島さん」

[絵] 手嶋 遥
(武蔵野美術大学院 日本画コース)



[参照文献] 第一話・第二話とも「香川の伝説」香川県国語教育研究会より/話者 大石光政

[表紙絵] 武田^{なほ}納穂(武蔵野美術大学院 日本画コース)

[イラスト] 正木^{さあや}沙綾(武蔵野美術大学 日本画科)

ぼう ず や しき

敷屋主坊

え：こばやし だいご

讃岐の国 瀬戸の海の中ほどに

たくさんの小さな島々が

太陽の光を浴びて輝いていました

その中でも 一番大きな島

広島に伝わる 昔ばなし

王頭山が「どんどろ山」と

呼ばれていた頃のおはなし・・・

王頭山（どんどろ山）
塩飽諸島の中でも一番高い山。
312メートル。頂上からの眺めは絶景。



「どんどろ山」の頂上には

四季折々の花が咲き

小鳥がさえずり

村人たちが集まる

立派なお寺がありました

おじゅっさんは

気さくな人で村の人気者

村人たちは「どんどろ山」に

よくお参りに登っていきよりました

おじゅっさん
坊さん、住職さんのこと。

いきよりました
行っていました。



ある日ひ

背せの高たかさが3メートルはあろうかという

まるで仁王におうさんのような大男おおおとこが寺てらに現あらわれた

ぼろぼろに破やぶれた衣ころもの間あいだからは

肩かたや腕うでの筋肉きんにくがもりもりと

盛もり上あがっているのが見みえる

おまけに胸むねから背中せなかまで

毛けむくじやらだ



「たのもう

この寺てらで わしを修行しゅぎようさせてくれ」

おじゅっさんは 困こまった顔かおをしながらも

「まあ しばらくの間あいだなら よかろう」

この大男おおおとこを 寺てらに泊とめることにした

ところが ところが

ところが・・・



この大男おおおとこが のっしのっしと 歩くあるだけで
村人むらびとは びっくりぎょうてん!
地じひびきで 地面じめんが揺ゆれだした

とにかく この大男おおおとこ

おじゅっさんの言いうことは

ぜんぜん聞きかんし

村むらへ行いって悪わるさをしては おおあばれ
もう何なんでもかんでも したい放ほう題だい

おじゅっさんは ほとほと 困こまりはて

「はよう どこかへ

行いってくれんかのう」と
願ねがった



おおおとこ そうどう
大男の騒動が続く

そんなある日のこと

むらびと
村人たちは

うわさの天狗を 思い出した

「どんどろ山のすそ野の

え 江の浦の東の方にある とんぎり石と
にし 西の方の天の岩が 天狗さんの休み場らしいぞ」

「わしはまだ 一度も見たことがないんやけど

てんぐ 天狗さんは 瀬戸の島々の見張り役なんや」

「そうだ 悪い者をこらしめてくれるという

てんぐ 天狗さんに お願いしてみよう」

むらびと
村人たちは動きだした



しばらくして 二人ふたりの天狗てんぐが
いつもの休み場やすまに やって来たき

すると

どんどろ山やまの頂上ちようじようで

「ドシン ドシン ガラガラガラッ」

何なにかが壊こわれるような音おとがする

お寺てらのあたりからも 煙けむりがもうもうと

立たちのぼっているではないか

「おかしいぞ」

天狗てんぐたちは立たち上あがった

「それっ いそげ いそげ」



「あつ　　どんどろ山のお寺が燃えている！」

「大きな坊主が　　口から真っ赤な
火を吐いているぞ」

「あの大男　　火を吐く術を持った
怪物に違いない」



あつという間に

どんどろ山やまについた天狗てんぐは

シュワーツと 瞬またたく間に 火ひを消けし

「おのれ 怪物かいぶつめ！」

天狗てんぐは二人ふたりで力ちからを合あわせて取とり押おさえ

「エイ ヤア」

ビューーン

はぶしの岩いわをめがけて

海うみの中なかへ投なげ飛とばした

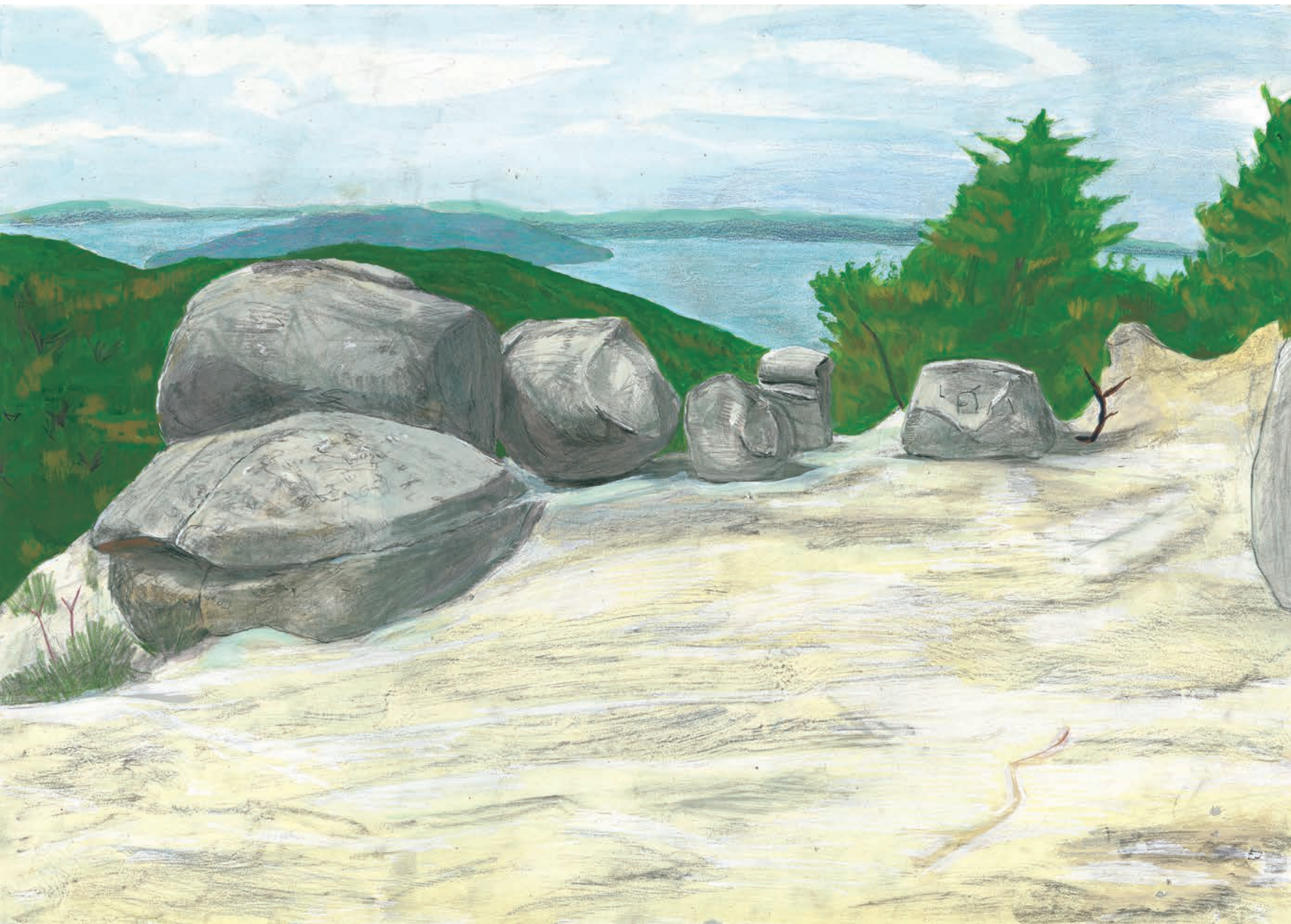
ほどなくして

天狗てんぐたちは 何なにごともなかつたかのよう

西にしの空そらへ飛とんでいった

はぶしの岩（波節岩）

江ノ浦の南西海上にある岩礁。（今は灯台になって船の安全航行を見守っている）



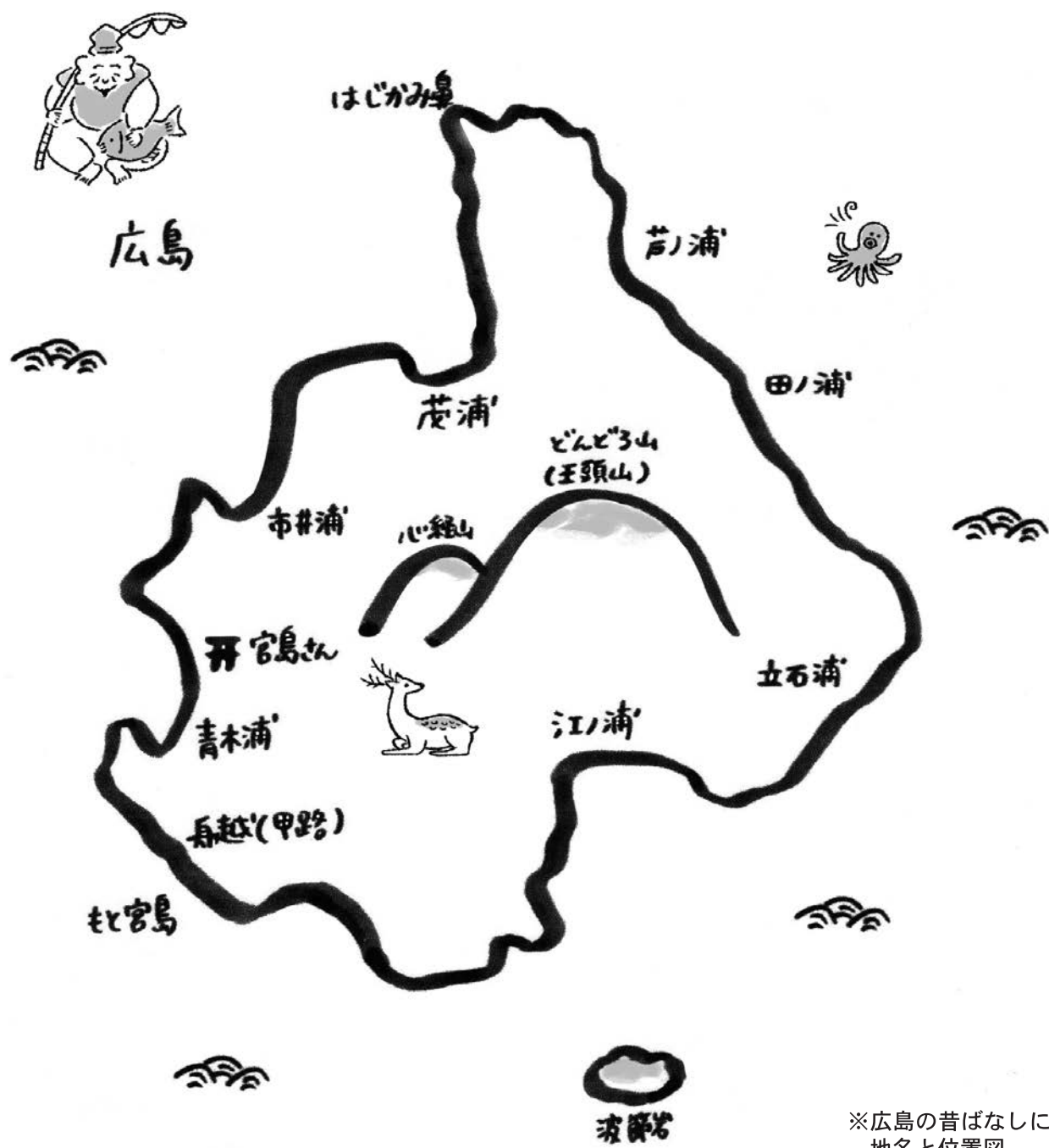
こうして
天狗のおかげで 怪物は退治できたのだが
お寺はすでに跡形もなく
すっかり焼けてしまった

今のどんどろ山の頂上には
ポツカリと開けた空き地が広がっている
そこだけが 岩と砂だけで
一本の草も木も生えていない

島の人々は 今ここを
王頭砂漠(坊主屋敷)と 呼んでいる

ところで
焼けてしまったお寺はその後
村人たちの手助けで ふもとに
新しく建ったそうなの

いやはや めでたし めでたし



※広島のお昔ばなしに出てくる
地名と位置図



瀬戸内海には、たくさんの美しい島がある。
その真ん中あたり、東と西から満ち潮がぶつかり、海の水がわき立ち、
泡立つところにある島々を塩飽諸島(しわくしょとう)と言う。

絵・手嶋 遥

今から千三百年ほど昔。

広島島の北の端「はじかみ鼻」に、

若い女の神様が、どこからか お渡りになった。

瀬戸の海の美しい島に 社を構え、

海の守り神になろうと、

お考えになられたのだった。

はじかみ鼻は、細く海に突き出た岬で 切り立った

岩場であつたので、近くの茂浦までおいでになった。

しかしここは人家も多く、麦畑や野菜畑からは、

肥やしが匂うし、村人達の人目にもつく。



「もっと気持ちよく住める所が、

ありそうなものじゃ」

と、若い女の神様は峠を越え、

浜辺を渡って甲路までお越しになった。

甲路は、海まで迫った山に囲まれた、

人も滅多に近寄らない静かな谷あい

谷川には清らかな水も流れていたので、

神様はたいそう気にいられた。

小さな小屋を建てて、しばらくはそこに

お住まいになることになった。



神様は、毎日毎夜 そのお住まいから出られて
島をくまなく お調べになられた。

というのも、神様がお探しになっている島というのは、

七浦、七戎、百谷と言って、

七つの浦、七つの戎様、百の谷のある島で

なければならなかったのである。

七浦、七戎、これらは神様のお気持ちに叶っていた。

ただ、広い島のこと 本当に百谷あるかどうかは、

調べてみなければならなかった。

神様は矢立てをお持ちになり、

「ひと谷・ふた谷・み谷・・・」と書きしるしながら、
一心に、島内をお調べになった。

矢立て(やたて) 墨の壺が付いた筆づつ

広島には、芦ノ浦・田ノ浦・立石浦・江ノ浦・青木浦・市井浦・茂浦と七つの浦があり、しかもその浦にはそれぞれ戎様(生業を守り財福をもたらす神)をお祀りしてあった。これは現在も残っている。



七な日の七かな夜な、ようやく最後の茂浦さいごもうつらの

谷たにまで数かずえてこられた。

「・・・九十七谷きゅうじゅうしちやう・九十八谷きゅうじゅうはちやう・九十九谷きゅうじゅうきゅうやう・・・」

どうしたことだろう。

なんと満願まんがんの百谷ひゃくたにには、

もう一谷ひとつたに、足りないのである。

あまりのことだ、

神様かみさまは手にしていた矢立やたててを投げ捨なて、

「あぁーあ、この島しまも、

私の住わたくしめる島すではなかつた。」

と、力ちからを落おとされて、

しばらくは ただぼんやりと

立たちつくされた。

茂浦の砂浜には、茶色や白い石に混じって小さな黒い石が見られるが、これは、このときの矢立ての墨が飛び散って付いたものと言われている。



ある日、一そうの船が 甲路の沖に 漁に出かけた。
その船には、ひとりの若い漁師が乗っていた。

ふと浜辺に目をやると、波打ちぎわの岩の上に、
若い娘がたたずんでいる。

漁師が不思議に思って 船を近づけて見ると、
島ではめったに見かけぬ 美しい娘である。

娘は、船を手でまねきながら、

「もしもし、漁師さん。」

私は西の方の 大きな島に渡りたいのです。どうか、
あなたの船に乗せて連れて行ってくださいませんか。
と、ていねいに頼んだ。

・・・これは何だかわくがありそうだが、
娘は上品に見えるし、なによりも、たいそう美しいぞ・・・

そんな娘のたつての頼みでもあるので、

「へえ。よろしゅうございます。」

それでは今から連れて行ってあげましょう。
と、ふたつ返事で受けあってしまった。



娘むすめを乗のせた漁師しよつしの船ふねは、追手おいて（追おい風かせ）に帆ほをはらませ、艦くさねを力ちからいっぱいこいで、船ふねを西にしへ西にしへと進すすめた。

たくさんたくさんの島々しまいづまが現あっては、後うしろへと去ひって行く。しかし、どの島しまも娘むすめの意いにそぐわないようである。

昼ひるも過すぎ、やがて夕暮ゆぐぐれに近ちかくなるうとする瞬間しゆんかん、遠とおくに大おおきな島しまが現あつた。うす赤あかく染そまりはじめた西にしの空そらに、その島しまは、影かげ絵えのように、美うつくしく浮うき出でて見みえた。

「あの島しまがいい。
ああ、あの島しまに私わたしを連つれて行いってください。」
と、娘むすめが言いった。

潮しほの流ながれにも乗のって、船足ふなあしはとて速はやい。
ほっと安あん心しんしたからだろうか、娘むすめは
うつらうつらと、いねむりをはじめた。

なおも若わかい漁師しよつしは、いっしょうけんめいに艦くさねをこぐ。
入り日いひが海うみを真まっ赤かに染そめ、めざす島しまが近ちかづいた。



ああ
あの島は……

漁師は、娘に声をかけようとして

船の胴の間に目をやったとき、

そこに、一匹の大きなへびがとぐろを巻いて、

大きく いびきをかいて寝ているのを見た。

「わあーーーーっ！」

思わず声をあげると、漁師はそのまま

気を失ってしまった。

しばらくして、夜露にぬれて気がついた漁師が

恐る恐る船の胴の間を見ると・・・

そこには、娘の姿も 大蛇の姿も、

何もなかった。

胴の間

船の中央の部分。横板が渡してある。



わあーっ

安芸（広島県）の、宮島さんのある厳島は、

七浦・七戎・百谷の島であるという。

塩飽の人たちは、安芸の宮島さんの御神体は

蛇であることを信じ、長く語り伝えてきた。

また、広島には百年ほど前まで、たくさんの鹿がすんでいた。

白い砂、青い松と、安芸の厳島とは似かよったところが多い。

明治三年、広島の人々は安芸の宮島さんの御神体を分けてもらい、

広島のお地にお迎えした。

ゆかりの深い甲路の海岸近く舟越に、床の高い社を造り、

海には鳥居を建ててお祀りをした。



なお、この伝説には、もう一つの話がある。

そのころ、甲路は、青木浦 字小浦と

呼ばれていたが、明治の終わり

一つの村に 神社が二つもあるのは、いかがなものか？

と言う話が持ち上がった。

そして、大正三年、心経山のふもと

青木浦の青野神社の境内に

御神体は移された。

現在の青木の宮島さんがそれであり、その後、

「塩飽の宮島さん」として、島の人達の、にぎやかな

夜祭りが繰り広げられてきた。

字小浦の舟越（甲路）にあった宮島さんは、跡形もないが
今も「もと宮島」と呼んでいる。





さぬき広島の昔ばなし刊行にあたって



この度、平成25年度からの、離島人材育成基金助成事業（公益財団法人日本離島センター）を受け、この小冊子を発行することになりました。

初年度では、私たちが住んでいる、さぬき広島を見つめ直すことから島案内人養成講座を企画し、広島の歴史と文化、そして伝承されている民話などを掘り起こす作業から始めました。

その過程で、まずは地元を知ること、さらに島を訪れる方々への案内役となる「HOTな島歩きマップ」を作成しました。

平成26年度では、広島に伝わる昔ばなしに目を向け、紙芝居、絵本作りに発展させることになりました。

幸いにも3年前の平成24年から、夏の1ヶ月間、島で暮らしながら美術制作活動をされている東京在住の美大生「HOTサンダルプロジェクト」の皆様のご協力を得て、念願の絵本が出来上がりました。

最後に。この絵本を手にとってくださった皆様が、民話として繰り返し広げられている、さぬき広島の風土や島の人々の温かさを身近に感じていただければ、制作者一同、これ以上の喜びはありません。

平成27年3月 島案内人実行委員会

※「HOTサンダルプロジェクト」

未来のアーティストへの支援として、瀬戸内海の離島にて、若い学生たち（武蔵野美大、多摩美大、女子美大）が長期滞在をし、島民との交流（ワークショップ、作品発表会）を図りながら、本格的な芸術創作活動に取り組む先進的なプロジェクト。

== H（広島と本島）、O（小手島）、Tは（手島）。そしてサンダル（夏） ==

